香川大学看護学雑誌創刊 25 周年記念特集

# 香川大学医学部看護学科における看護学研究の 25 年

〔記念寄稿〕

# 香川大学看護学雑誌創刊 25 周年記念特集
# 香川大学医学部看護学科における看護学研究の 25 年

## The 25th Anniversary Special Issue of Nursing Journal of Kagawa University
## ～ 25 years of nursing research in the School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University ～

「香川大学看護学雑誌」25 周年記念編集委員

慢性期成人看護学　清水　裕子

The 25th Anniversary Special Issue of Nursing Journal of Kagawa University Editorial Committee

**Chronic Adult Nursing, Professor Hiroko Shimizu**

寄稿
Contribution

上田夏生医学部長
Dean of the Faculty of Medicine, Professor Natsuo Ueda

田中輝和香川大学名誉教授
Professor Emeritus of Kagawa University, Terukazu Tanaka

宮武陽子元香川大学教授
Former Professor of Kagawa University, Yoko Miyatake

キシ・ケイコ・イマイ元香川大学教授
Former Professor of Kagawa University, Kishi Keiko Imai

内藤直子香川大学名誉教授
Professor Emeritus of Kagawa University, Naoko Naitoh

香川大学看護学雑誌創刊 25 周年記念特集

# 香川大学医学部看護学科における看護学研究の 25 年

「香川大学看護学雑誌」25 周年記念編集委員
慢性期成人看護学　清水　裕子

特集の趣旨

平成 8（1996）年に香川医科大学で看護学教育が始まり，看護学の教育研究活動が始動した．令和 2（2020）年，香川大学大学院医学系研究科看護学専攻は，開設 20 年目を迎え，その研究成果の発表の場となっている「香川大学看護学雑誌」は創刊から 25 年目を迎えた．これまでの 25 年間に看護学雑誌を通して蓄積した所産を振り返り，本誌の役割と看護学研究の今後を考えたいと思う．

看護学科が開設して 10 年目，平成 18（2006）年には盛大な 10 周年記念行事が開催され，10 周年記念誌が発行された．20 年目を迎えるにあたり，平成 26（2014）年度の看護学科会議において，20 周年記念行事の計画はなされたが，次年度にその計画は流れた．

令和 4（2022）年度の博士後期課程開設を進める中，既に開設当初からの学科運営を知る人も殆どいない．先人のご苦労と不断の努力をここに記しおきたいとの思いから特集記事の作成に至った．

＊＊＊＊

## 【寄稿】香川大学医学部看護学科開設 25 周年によせて

香川大学医学部長
上田　夏生

香川大学医学部は，昭和 53（1978）年に香川医科大学として創設され，平成 15（2003）年に旧香川大学と統合して現在の形になりました．医学科と看護学科に加え，平成 30（2018）年に臨床心理学科を開設して 3 学科体制となり，現在に至っています．

看護学科は平成 8（1996）年に看護学に関する教育･研究を行うことを目的として設置されました．令和元（2019）年度末で，同学科卒業生は 1,388 名を数えます．入学後の選択により養護教諭一種の免許を取得することができます．保健師課程も設置していましたが，看護，社会の変革に対応する実践能力を備えた保健師育成を目指すため，令和元年度入学生をもって終了し，今後は大学院修士課程で養成する準備を進めているところです．

大学院につきましては，医学系研究科看護学専攻（修士課程）が平成 12（2000）年に設置されました．令和 2（2020）年 9 月末までで，173 名が同専攻を修了しています．令和 2（2020）年には同専攻に助産学コースを開設し，修士課程で助産師の養成を開始しました．また，同専攻に博士後期課程を設置する計画を進めています．

開設 25 周年を迎え，本学科はこれまで以上に質の高い看護専門職者の育成が求められています．「人生 100 年時代」が決して誇張ではない長寿社会を迎えるにあたり，看護の役割は拡大されつつあり，社会の変化に柔軟に対応できる能力が必要とされています．特に，学生の間に国際的な視野を持ち多様な価値観を理解することや，多職種連携を学び，地域の保健医療の向上への関心を高めることがますます重要になっています．また，全国に看護系大学，学部が続々と誕生する中で，看護学の教育・研究者の養成も大切な使命です．看護学の研究の発展に向け，医学科・臨床心理学科・附属病院さらには他学部等との共同研究の推進がいっそう期待されます．

関係者の皆様にはこれまでの御支援御協力に感謝申し上げるとともに，今後とも引き続き御支援賜りますよう，どうかよろしくお願い申し上げます．

# 【寄稿・転載】10年目までの沿革―看護学科開設十周年記念誌から

香川大学名誉教授　田中　輝和
【看護学科在籍：平成11（1999）年4月1日～平成25（2013）年3月31日】

平成4（1992）年4月20日付の『香川医大病院ニュース』（第100号）の巻頭文は，香川医科大学（現香川大学医学部）附属病院初代看護部長を同年3月に辞して日本看護協会理事に就任した田間恵實子氏の「附属病院創設のあれこれ－退官に当たり思いつくままに－」でした．その中で，田間氏は「教育といえば四国の中では，香川県だけ看護系の大学も短大もないというなさけない記録があります．近々本学にも大学教育が開始されるよう切に祈ります」と述べています．

それから2年後，平成6（1994）年4月20日の教授会で，平成8年度の看護学科設置に向けて準備を進めることが了承され，当時の入野昭三学長と字多弘次副学長を中心に，主に教育研究組織（教官の確保）及びカリキュラムの準備に取りかかりました．平成6（1994）年6月22日付で字多副学長が看護学科設置準備室長に，伊東久恵附属病院看護部長（当時）が看護学科設置準備室主幹に任命され，看護学科設置準備委員会が組織されました．平成7（1995）年2月10日の準備委員会において，概算要求やカリキュラム編成，施設建設計画などの具体的業務を担当するために，総務部会，教務部会及び施設部会の3部会が設置されました．更に，看護学科設置のための具体的な準備作業を進めるために，平成7（1995）年4月1日採用予定の看護学科配置教官の選考が行われ，2月15日の教授会で承認されました．医学科の関係講座の協力により，教授1名，助教授1名，助手（正式発令時は助教授）1名の3名の教官が平成7年4月1日付で採用されました．看護学科設置準備委員会には高木永子教授，近藤裕子助教授が参画し，平成8年度の看護学科設置に向けて，カリキュラム編成や概算要求，施設の建設計画などの膨大な作業を，看護学科設置準備委員会各部会の委員及び事務局との連携のもと，日夜献身的に行いました．平成7（1995）年8月，文部省（現文部科学省）の平成8年度概算要求項目に香川医科大学医学部への看護学科設置費が盛り込まれることになりました．文部省の厳しい指導の下，大学院修士課程をもつ4年制看護学科の新設に必要な資格のある看護系教官の確保には大変な苦労を伴いましたが，関係各位の努力と学内外の協力のお陰で，平成7（1995）年9月3日には，看護学科配置予定数官の最初の打合せ会議が開催されました．平成7（1995）年12月23日の文部省事務次官折衝において，看護学科の設置が正式に認められ，認可されたのは，平成8（1996）年4月から新入学学生60人及び3年次編入学生10人の定員と，基礎看護学講座，臨床看護学講座，地域・精神看護学講座の3大講座でした．教官定員は，設置審議会審査済みの講師以上の看護系教官14名と医系教官3名，助手11名の計28名でした．

平成8（1996）年4月1日，看護学科の開設に伴い，2名の看護学科教官が正式に発令され，高木教授と近藤助教授が看護学科基礎看護学講座基礎看護学の教授と助教授に正式に就任しました．また，平成9年及び10年度赴任予定の看護系教官3名が前倒しで，更に病院講師流用の医系教官1名（＋1）が同時に発令されました．平成9年度には8名の看護学科教官が発令され，平成8年度と合わせて13（＋1）名となりました．更に学年進行に従い平成10年度に3名，平成11年度に2名の教官が発令されました．助手の採用は平成9（1997）年10月から始まり，原則として臨地実習の時期の早い講座から順次発令され，平成12（2000）年4月には定員の11名を充たしました．

初年度の入学試験は変則的に平成8（1996）年4月13，14日に実施され，4月24日に看護学科第1期生60人の入学式を挙行，4月26日から講義が始まりました．講義は，看護学科教育研究棟が出来るまでの間，医学科の講義室で行われ，平成7年～10年度発令の教官の研究室としては，医学科基礎臨床研究棟の会議室などが暫定的に使用されました．平成8年7月3日にサンメッセ香川において，看護学科開設記念式典が盛大に行われました．

看護学科教育研究棟の建設は，事務局施設課と看護学科教官との綿密な打合せによって進められ，平成10（1998）年3月31日に第1期工事が竣工し，続いて第2期工事が平成11（1999）年3月31日に竣工しました．第1期生が4年生になった平成11（1999）年4月に，それまで医学科基礎臨床研究棟に仮住まいしていた看護学科教官は全員，看護学科教育研究棟の新研究室に移転しました．また，この年の7月2日看護学科教育研究棟の1階ラウンジにおいて，看護学科教育研究棟竣工記念式典が挙行されました．

大学院修士課程の設置に関しては，第1期生の卒業時の設置を目標に研究教育組織の充実と教官の業績向上に努め，平成12（2000）年4月に香川医科大学大学院医学系研究科看護学専攻（修士課程）が定員16人で発足し，大

学院第1期生の入学式が4月24日に挙行されました．在職中の看護師・保健師が離職することなく修学出来るよう昼夜開講制をとっています．

平成15（2003）年10月1日に，香川医科大学は旧香川大学と統合し，本学科は香川大学医学部看護学科となりました．統合時に，竹内博明教授（基礎看護学講座健康科学）が新しい香川大学の副学長（教学担当）に就任しました．統合に伴い，香川大学は総合大学となり，他学部との連携により，より幅の広い資質と人間性を有する看護師及び保健師の育成が可能になるものと期待されています．

（転載について著者了承）

## 【寄稿】看護教員としての歩みの軌跡から看護学科時代の13年間を振り返る

第6代学科長・元教授　宮武　陽子
【看護学科在籍：平成7（1995）年4月1日～平成20（2008）年3月31日】

看護学科創設25周年，誠におめでとうございます．

平成8（1996）年の開設以来，決して平たんではなかった看護学科の歩みの歴史を思うと，感慨深いものがあります．

私は平成7（1995）年の開設準備室から平成20（2008）年までの13年間，慢性期看護学領域の教員として在籍しました．29歳で看護教育の道に入り，令和2年（2020）3月に42年間の看護教員としてのキャリアを終えるまで，東京，千葉，愛媛，香川，高知，徳島と各県の看護教育機関を転々と移動してきました．保健師になるために病院で臨床経験を積みたい，人間をもっと深く理解するために大学で学びたい，看護をもっと深く見つめたいと，その時々にとった私の選択は，偶然にも自分の意志とは全く異なる看護教員としての歩みにつながっていきました．開設準備からかかわりを持った教育機関は実に3施設に上ります．時代の要請は看護教育を専門学校から短期大学へ，短期大学から大学へ，大学から大学院へと，形を変えていきました．私の看護教員としての軌跡は看護教育制度の変遷の軌跡と重なるといっても過言ではありません．常に時代の変化に動かされ，追われていたように思います．香川大学看護学科で過ごした13年間は，そのような私の看護教員としての歩みの折り返し点であり，転換点となりました．

看護学科開設準備室が香川医科大学に置かれたのは，大学設置基準の改定（平成3年）により，各地で看護系大学が開設ラッシュに沸く頃でした．少子高齢化，疾病構造の変化など迫りくる社会の健康ニーズに対応できる看護職者の育成への期待が高まり，看護教育の大学教育化に追い風になりました．看護師の質の担保のための教育制度の改革は看護界の長年の悲願でしたが，大学教育化に伴う看護教員の質的量的担保の課題は残され，大学教育化には賛否両論がありました．矛盾を内に孕みながらの看護学科の出発でした．学科開設の礎を築かれた入野学長，高木永子先生ほかの先生方のご苦労，ご尽力は計り知れないものでした．教育組織としての形も次第に整い，平成8（1996）年に第1期生を迎えることができました．無からの出発に教員も学生も戸惑いながらも，新たな看護師像を目指し，新しい歴史を作り上げていくという共通の目標に希望とエネルギーがありました．特に学生達が看護の知識も経験も少ない中，論理を組み立て，看護を自分の言葉で説明していく姿に驚きと高いポテンシャルを感じました．自由でのびのびと学ぶ学生の姿は専門学校や短大のそれとは異なる大学教育の可能性を感じました．一方，つらいこともありました．事故によりハンディを負っても看護を学びたいと切望した学生の志しに学科として応えることができなかったことは，私にとって，看護の大学教育とは？看護師教育なのか？看護学教育なのか？大きな疑問となって残り，今でも明確な答えが見いだせないでいます．

看護学科が船出して4年目の平成12（2000）年に医学系研究科看護学専攻コース（修士課程）がスタートし，臨床・教育現場の問題・課題を抱えた看護師や看護教員が生涯を通して学べる道を拓くことができました．

平成15（2003）年には香川大学と香川医科大学の統合化，平成16（2004）年には国立大学独立行政法人化という大きな組織変革が相次ぎ，対応に追われました．平成18（2006）年に看護学科創立10周年記念式典・祝賀パーティーを香川県民ホールで開催することができました．秋晴れの瀬戸内の青い海と空を眺望する素晴らしい景色の中で行われた式典は忘れられません．

私は看護学科への着任を契機に，急性期看護から慢性期看護に転向しました．慢性期看護の知識を体系化していくために附属病院の糖尿病外来で実践経験を積みましたが，そこで得た知見を授業や研究に仕立てていくのに大変苦労しました．大学教員としての職責である教育，研究，地域貢献のどれも中途半端な自分に大変悩んでいたように思います．振り返れば，その時の経験が私のその後の看護教員の道を切り拓いてくれ，糖尿病看護ネットワーク（Q の会）の設立，慢性疾患専門看護師や認定看護師の育成，平成 26 年の日本糖尿病教育・看護学会学術集会開催など，活動の幅を拡大することにつながっていたことに思い当たります．とても重要な看護教員としての転機になっていたと思い，感謝です．

最後に，看護の大学教育化への移行から 30 年，看護学科はこれまで高度な看護の実践家，研究者を多く輩出してきました．臨床の現場ではより高い確かな実践力を持つ看護師が育っています．しかし，臨床現場の看護実践の質の改善にはまだ至っておらず，その背景には実践現場を複雑に，多忙にさせている多様な社会的要因が関与しているように思います．看護界ではいまだに大学教育に対する懐疑的な風潮もあります．臨床現場と教育現場の乖離が起きつつあるのではと心配になります．老婆心ながら，臨床現場と教育現場がお互いの知を認め合い，相互に活用しながら，問題解決にともに取り組んでいただければと思います．創設 25 年という節目を迎え，継続を力に看護の大学教育の強みを生かし，より一層発展していかれますことを期待しております．　（令和 2 年 8 月末日）

## 【寄稿】開設当時のあれこれ：玄関ロビーの絵画の由来と修士課程開設

香川医科大学医学部看護学科初代学科主任（後年の学科長）・元教授
キシ・ケイコ・イマイ　Kishi Keiko lmai, DNSc., MSN., BSN
【看護学科在籍：平成 9（1997）年 4 月 1 日～平成 14（2002）年 3 月 31 日】

光陰矢のごとし，あっという間に時はすぎ，創設時代に関わる歴史を知る人々も少なくなったということで，何らかのかたちに記録として残しておくことにより，看護学科の文化は維持され，発展していくものと考え，看護学雑誌刊行 25 周年の原稿依頼を受けましたこと，光栄に思います．

私（図 1）が卒業した，フィラデルフィア市のペンシルバニア大学看護学部大学院では，同窓会誌，ThePennsylvenia Gezette に各学部の主なニュースが 2 ケ月毎に送信され，看護学部からは，Homecoming の時期に学部の教授，卒業生，夜学生の状況や，助成金，募金の状況が連絡されます．看護学部棟のロビーには歴代の看護学部長の肖像画が展示されています．

さて香川大学医学部看護学科に新築の看護教育研究棟ができ，玄関ロビーのイメージをどう作ろうかということで，看護学科教授会でそれぞれの教授が提案資料を提出し，全員に選ばれたのが，この絵画（図 2），今井ロヂン作「I 嬢」の油絵でした．今井ロヂンは私の父で，この作品は二科会員として，第 64 回二科展，1979 年に出品されたものです．（注：今井ロヂン（艦）（1909-1994），1941 年；藤田嗣治に師事，1955 年；TIMES 誌上に掲載，1970 年；二科会会員審査員，1975 年；二科会員努力賞・日芸絵画大賞，作品は海外大使館 10 箇所などに所蔵）

父は藤田嗣治を師とし 1941-1949 年まで，師が米国に去るまで仕え，最後の一年半は師の練馬小竹町のアトリエで生活を共にした唯一の弟子でした．ロヂンの独創性と創造性が完成したのは，1970 年から 1980 年代で，「I 嬢」は彼の最盛期の作品の一つで，彼の哲学，「美は万物にまさる」として，「永遠の命，躍動する静，優雅，愛情」を表現しています．ロヂンの画名は祖父

図 1　キシ・ケイコ・イマイ佐久大学・元香川大学教授
2013 年 9 月 19 日～23 日小諸高原美術館での水彩画展

図 2　看護学科棟 1 階ロビーの「I 嬢」（1979 年）今井ロヂン作（寄贈（財）誠恵会）

が命名しました．海軍技師でイタリー，トリノで潜水艦のエンジンの研究のため 1917 年から二年間留学し，日本で，最初の潜水艦のプロトタイプを制作したことで，画家を目指す息子に広い海を操る人と名付けました．当用漢字で「艦」という漢字が使われなくなり，ローマ字になりました．

次に，私が現在思うことを少し書きます．香川大学医学部看護学科の修士課程は私が最も力を入れた仕事の一つで，これはペンシルバニア大学看護学部，修士課程のモデル・コアカリキュラムをもとに作成されました．このプログラムは令和元（2019）年文部科学省が提出している，実に洗練されたモデル・コアカリキュラムのプロトタイプと考えても良いと思います．私が学科長（当時は学科主任と称した）として在籍した時代には国内で修士課程が十数校でしたが，現在令和 2（2020）年には 175 校，また博士課程が 90 以上と増加し，変化の激しい新しい時代の要求に対応できる教育体制，人材育成が整い，国際レベルの質の高い教育を外国に留学しなくても国内で受けることが可能になりました．これからの看護大学，大学院の卒業生が幅広く看護実践に貢献し，看護知識体系の充実のための研究を進め，それぞれ独創的な分野を開拓し，ヘルスケアのリーダーシップをとっていけば，2020 年のコロナヴィールス禍を生き抜くことができるのではと考えます．香川大学医学部看護学科の繁栄を祈ります．

## 【寄稿】香川大学看護学科の 25 周年記念に懐かしい思い出を寄せて

香川大学名誉教授　内藤　直子（岐阜保健大学教授）
第 3 代看護学科長・初代医学部副学部長
【看護学科在籍：平成 12（2000）年～平成 24（2012）年 3 月】

看護学科 25 周年を迎えられましたこと，誠におめでとう存じます．

香川大学の皆様，ご無沙汰していますがお元気でございますか．COVID-19 で大変なご苦労と拝察します．

思い出話のご依頼をお受けしまして，少し筆を進めさせて頂きます．思えば，平成 12 年 4 月 1 日（2000）に，奈良県立医科大学看護短期大学部から新天地の香川に参りましたのは，昨日のようで，あっという間の歳月でした．香川大学で，私の歩んだ看護学の教育と研究，日々の過ごし方に強い影響を与えたのは，文部省在外研究員として平成 13 年 4 月から短期留学で，カナダのカルガリ大学で国際的に家族看護学を提唱し世界に広められた L.M.Wright 博士の研究姿勢でした．冬はキャンパスでオーロラが見えたり，ヒョウや雪に見舞われたり，ライラックスや桜が満開の頃はドミトリーにかわいいリスが訪れ癒されました．

思い出は走馬灯のようで，平成 15 年 10 月には，旧香川医科大学と香川大学が統合し，平成 16 年 4 月には法人化となり，この法人化により，予算や研究資金獲得，産学協同研究や，大学連合プロジェクトや，教育や研究の結果説明が全ての分野で求められました．看護教育 4 年間で，どこまで看護実践応用力が育っているかの説明など，苦戦苦闘の日々のなか，国の経費削減で教員不補充の波が押しよせ，教員数が徐々に削減されました．

在籍中には多くの国際交流を体験しました．平成 15 年 9 月には，マックマスター大学看護学部バサンシ･マジェンダー博士を招聘し，看護学科国際交流特別セミナーを開催しました．タイのプラパ大学看護学部長と出会い，平成 16～18 年度文科省科研補助金基盤研究（C）で共同研究ができました．また，平成 18 年に香川大学医学部重点化研究補助金とカルガリ大学カレン教授とともにカルガリ大学看護学部長研究奨励金が得られ，7 月にカレン教授が香川大学看護学科に来訪され，学生のカルガリ大学短期留学に道を拓きました．タイのチェン・マイ大学や河北医科大学などで看護留学生の御世話などをさせていただいたことは印象深い思い出です．「讃岐の丘から世界へ発進」を合い言葉に，看護学科の国際交流委員長として教員や学生のなかまと共に活動ができましたことは，現徳田雅明副学長のご支援の賜物でありました．その情熱のおかげで平成 24 年 3 月には，全学学術交流協定の一部としてタイのチェン・マイ大学看護学部と香川大学医学部看護学科

図 3　チェン・マイ大学にて（左から清水教授，Wipada 学部長，内藤教授）

との間で調印式を行うことができ，その後の学生留学の継続に道が開かれました．退任後の平成 24 年 9 月にはチェン・マイ大学看護学部で「Global Health Outcomes」の国際会議に，香川大学看護学科共催の合同会議にも参加させて頂き，藍野大学の教員 10 名も同行し研究発表会場では，清水裕子教授らと多くの先生にお会いできました（図 3）．

香川での研究活動は大学院修士生の論文主査と副査が 25 論文あり，学長賞として第 1 回，第 2 回，第 3 回，第 4 回と表彰され，院生の喜びとともに指導教授としても誇らしく思われる瞬間でした．これは，院生の努力のおかげであり感謝に堪えません．その後は大学院教授など多方面で活躍され，ある時は国内外で研究発表をされ，学会場でお会いできるのは望外の喜びです．

図 4　伊吹島での看護学科学生

それらの積み重ねにより，日本看護研究学会中国四国地域の学術集会長の時には大森美津子教授，香川母性衛生学会の第 2 回および 10 周年記念学術集会長などの際には佐々木睦子教授のご協力と香川大学や近隣大学の先生方や学部生，大学院生の支えや助け合いのおかげがありました．平成 19 年から 3 年間は学部ゼミ生と伊吹島を訪問し，楽しく地域活動を行いました（図 4）．思い出では，平成 12 年に同時に着任されたフィンランドのオウル大学の Helvi Kyngas 教授と出会え，先生は思春期 1 型糖尿病患者のコンプランスに関する看護の世界的な研究者でした．先生にネウボラ利用の母親調査を依頼しましたら，雪の中をご主人が 110 人の母親にアンケート収集して下さり，今も感謝に堪えません．

これまでの多くの先生方や事務部の皆様のご支援を賜りましたことに深謝いたしますとともに，看護学科 25 周年をお祝い申し上げ，ますますのご発展を心から期待し，エールをお送りいたします．

＊＊＊＊

## 香川大学医学部看護学科における看護学研究の 25 年

「香川大学看護学雑誌」25 周年記念編集委員
慢性期成人看護学　清水　裕子

### 1．香川大学における教育・研究者養成のはじまり「看護学科開設」

香川大学看護学雑誌は，香川大学の看護学教育とともにあった．平成 8（1996）年に医学部看護学科が開設された．開設から 10 年目までの沿革は，学科開設 10 周年記念誌に，記念誌編集委員会田中輝和委員長の手により記述され，後段に示す．これによれば，平成 4（1992）年当時，香川県には看護系の大学も短大もないと嘆かれていたとの記述があった．その後平成 6（1994）年，当時の香川医科大学教授会において，看護学科設置の準備が決議されたとある．

この頃は，日本の看護制度に関連する重要な時期であった．平成 4（1992）年には，厚労省において「看護婦 2 年課程検討会」が行われ，准看護師の正看護師への道が作られるための検討が開始された．平成 6（1994）年には「少子・高齢社会看護問題検討会報告書」が公表され，看護の変化に対応して，少子・高齢社会の看護は如何にあるべきかを探り，必要とされる看護を予測し，看護マンパワーの資質や養成のあり方，関連職種間の役割分担を明らかにし，今後の施策の推進方策を検討したことが公表された．看護学科開設準備が行われた平成 7（1995）年には，平成 6 年の少子・高齢社会看護問題検討会報告書を受け，医療関係者審議会保健婦助産婦看護婦部会の下に，看護職員の養成に関するカリキュラム等改善検討会が設置された．この報告書は，看護学科入学式を行った平成 8（1996）年に，公表された．従って，国内における看護師養成への国民からの期待も高まっていた時期であった．

平成 7（1995）年 7 月 31 日に文部科学省に提出された看護学科設置計画書では，大学の設置目的は，「香川県で

図 5　Rosalinda Alfaro-LeFevre 著 ‘Critical Thinking in Nursing’（1995 初版）（WEB 画像からの引用）

図 6　初代学科主任キシ・ケイコ・イマイ教授・第 2 代学科主任故竹内博明健康科学教授・副学長監修・監訳「看護倫理のための意思決定 10 のステップ」（WEB 画像からの引用）

は看護の高等教育機関が未整備であり，香川県を初め，地元各種団体から 4 年生の看護学科設置について強い要望がある」と記されている．地域医療の中核機関である本学に設置しようとする看護学科は，社会の要請及び地域の要望に応え，「生命の尊重を基本として，人間に対する高い倫理観と深い思索力によって，近年の医学・医療・福祉に柔軟に対応できる科学的判断力と技術を備えた看護専門職者になり得る人材の育成を目指し，もって社会の保健・医療・福祉の充実発展に寄与する」ことを目的とすると記載された．

開設時の教育内容の特徴といえば，看護専門各分野が「クリティカル・シンキング」の科目を有したことであろう．クリティカル・シンキングとは，物事の結論を導く過程において，「なぜ」「本当にそうなのか」と批判的に問うことで納得のいく結論に到達するための思考法である．かつてアメリカの教育界において，大学の学習が知識の詰め込みにあるのではなく，クリティカル・シンキングを使って客観的に判断，決断できるようにすすめようという方向になり，日本でもそういう流れが生まれた．折しも，日本では医学書院が Rosalinda Alfaro-LeFevre 氏の ‘Critical Thinking in Nursing’（1995 初版［図 5］，1999 年第 2 版）の日本語訳を江本愛子氏の監訳の元で行い，平成 8（1996）年 8 月に発刊した．Rosalinda Alfaro-LeFevre 氏は，米国ペンシルベニアの Teaching Smart/ Learning Easy の代表としてクリティカル・シンキングのセミナーなどを行い，看護の思考過程を開発した第一人者である．ペンシルベニア大学大学院で 1970 年代後半を過ごされ，平成 9（1997）年に着任されたキシ・ケイコ・イマイ初代学科主任が導入されたものと推察できる．この日本語版が国内で出版される以前に，既に当看護学科では，いち早く米国式の思考訓練法を導入しようと計画されていたことは感慨深い．開設時における先端的教育の機運が高まっていた所以であろう．このクリティカル・シンキング初版には，世界 50 カ国以上の看護師養成課程で活用されているユング心理学に基づく思考パターンの診断ツール MBTI が紹介されているが，このツールを使ったクリティカル・シンキングの養成は，10 年以上の時を待たねばならない．1980 年代当時，日本国内において就職雑誌業者の MBTI 検査の使用に際し，米国の実施ガイドライン違反問題が発生し，日本への導入が閉ざされた．その後，1990 年代になり，日本独自の使用ガイドラインに基づく教育への提供が認められるに至り，ライセンス教育が開始されて，ようやく教育において活用されるようになった．平成 21（2009）年に MBTI ライセンス取得者の教員が着任し，クリティカル・シンキングの国際水準に沿う実施が可能となった．現在でも国内医学部では希有である．

また，開設当初からの学科教育の特徴の 1 つは，「倫理的感性の醸成」であった．そのための教材作成が全学科的に行われた．それは，ペンシルベニア大学，ジョイス・E. トンプソンとヘンリー・O. トンプソン夫妻の著書を，初代学科主任のキシ・ケイコ・イマイ教授と看護学科健康科学教授，副学長であられた故竹内博明教授（第 2 代学科主任;学科長）監修･監訳の「看護倫理のための意思決定 10 のステップ」（図 6）の発刊である．本書のジョイス・E・トンプソン博士は，キシ・ケイコ・イマイ教授が 1982 年にペンシルベニア大学大学院助産コースで第 1 号の博士の学位を取得した際の所属教授であった．本書序文において，監修代表者であるキシ先生は，1999 年に英国で開催された Pre-ICN 倫理学会主催者のベレナ・チューデン女史が，2000 年に，本書日本語版に対してメッセージを送って下さったことを本書に記述された．それは，「香川大学医学部看護学科が教員の総力を挙げて，翻訳を行う」ことにふれ，看護教育にあたる教員らの倫理的感性を高める活動を紹介されたものであった．国際的な雰囲気の中で，研鑽する活動を通して，看護学科のアカデミアとしての品格を高めよう

とされてきた渾身の思いが伝わる序文である．その後，香川大学医学部看護学科は，「倫理的感性」の教育的素養を大切にする伝統が息づいているといえる．本表紙には，監修・監訳者と共に翻訳者「香川大学医学部看護学科」の名を付している．キシ先生は，本学医学部での在籍は長くはなかったが，永遠に残る所産をいただいた．感謝に堪えない思いである．

開設時のその他の科目には，基礎看護学の科目に「セルフケア教育」，成人看護学には「ナーシングアセスメント」，老年看護学には「老人と医用工学」，小児看護学に「家族看護論」，母性看護学には，「子どもが生まれる家族の看護」，地域看護学には，「離島保健･看護論」，精神看護学には「精神障害者のリハビリテーション」，看護管理･教育学には，「看護教育学」（平成 24 年度カリキュラム改正で消失）「国際比較看護論」（後に必須の「看護と国際」と科目名変更），総合看護学には，「原著購読」や「これからの保健医療と看護」があった．これらの殆どは，カリキュラムを豊かなものとする選択科目であった．令和 2（2020）年度迄続く「看護クリティカル･シンキング」や「国際看護論」（「看護と国際」）は当初の学科開設の理念を引き継ぐ本学科の特色ある教育内容といえる．また，2020 年段階では既に消失している「医用工学」が開設時に科目提供されていたことは驚きに値する．近年では，看護基礎研究において看護工学研究は盛んであり，当学科に着任の看護研究者自身が工学分野の専門家であって，あるいは複数の教員が看護工学連携研究を行っている現状に引きつがれており，これも特色ある教育研究内容といえよう．

平成 8（1996）年度の開設カリキュラムの後，平成 14（2002）年度にはカリキュラム改正が行われた．これは，同年の「新たな看護のあり方に関する検討会」の趣旨に基づいたものと考えられる．この改正の趣旨は，「少子高齢化の進展，医療技術の進歩，国民の意識の変化，在宅医療の普及，看護教育水準の向上などに対応した新たな看護のあり方について検討すること等により，質の高い効率的な医療の提供を推進する」ことを目的としたものであった．この検討会報告書の本学教育組織への影響は，その後の在宅看護学の講座開設に至る．

その後，平成 19（2007）年には，平成 20（2008）年度カリキュラム改正のために準備された新たな人材養成として，医学部における養護教諭一種免許の課程が開始された．これに先立つこと，開設認可教員数は 28 名であったが，教員がすべて着任した平成 12（2000）年度には 31 名の教員が所属した．しかし，平成 20（2008）年度開始の教護教諭教育課程には，専任者がおらず，平成 25（2013）年度まで看護教員が交替でその指導にあたった．平成 23（2007）年度には，医学部養護教諭課程の学生が養護実習を行うこととなり，医学部開設科目が追加された．教員免許法の開設と相まって「教職実践演習」の新設により，教育学部との一層の連携が必要になった．

この平成 20（2008）年度には，厚生労働省において「看護基礎教育のあり方に関する懇談会」が発足し，「在宅での療養生活を支える地域ケア体制の整備等の医療制度の変革も視野に入れた」検討がなされ，在宅看護学が新分野として求められた．この前年，本学科では，国立大学で唯一，在宅看護学教授ポストを確保し，専任教授が着任した．平成 26（2014）年度には，この在宅看護学講座が単位として独立し，名実ともに国立大学唯一の在宅看護学講座となった．このことは，香川大学医学部の第 2 期中期目標の特徴であった．

次のカリキュラム改正は，平成 24（2012）年であった．ここでは，看護師・保健師国家試験受験資格の教育課程を検討し，香川県内の養成目標数から，学部での保健師養成数を 20 名とし，3 年次生から保健師課程選択のカリキュラムとなった．60 名から 20 名に保健師免許数が抑制された中で，学生への公平な学習機会を担保すべく，選考体制を整えた．平成 25（2013）年度には，ミッションの再定義の準備が行われた．詳細は後段の通りである．同年，ミッションの一つに関連する修士課程の「国際看護学特論」を 6 年間の休講を経て再開講した．平成 26（2014）年度には，念願の退職養護教諭を養護教諭コースの非常勤専任教育補助者として迎えた．修士課程にも「養教教育特論」を開設し，専修免許状の取得に道を拓いた．令和元（2019）年度からは，大学院修士課程に助産学コース（佐々木睦子教授；第 10 代学科長）が開設され，定員 6 名となった．16 名定員のうち 10 名が臨床看護学コースとなった．助産学コース開設により学部からストレートで修士課程に進学する学生が増加した．11 月には，厚生労働省の看護基礎教育検討会報告書では，保健師・助産師・看護師・准看護師の教育内容などの見直しが行われ，総単位数を 97 単位から 102 単位とすること，「在宅看護論」を「地域・在宅看護論」に名称・内容を変更すること，自由な実習単位数とすることなどが盛り込まれたため，今後の課題となった．この年，カリキュラム評価と改正を行った．コア・カリキュラムを意識し，思考力養成，研究力養成，キャリア教育をコアとし，開設以来の特色ある教育とコアの調和，ミッションに応答するカリキュラムとして再構成された．令和 2（2020）年度には，令和 4 年

度に開設する博士後期課程の申請準備が行われ，同時に 10 名であった学部 3 年生への編入定員が若干名となった．

## 2．ミッションの再定義

文部科学省は，日本社会が直面する諸課題に対して大学が社会を変革するエンジンとしての役割を果たすため，平成 24（2012）年 6 月に「大学改革実行プラン」を策定し，大学機能の再構築とそのガバナンスの充実・強化という大学改革の方向性を示した．ミッションの再定義は，この改革プロセスにおいて各大学・学部がその設置目的を明確化し，公的機関としての存在意義を明らかにすることであった．

本学のミッションの再定義検討は，香川大学評価担当大平文和理事のリーダーシップのもと，第 8 代清水裕子学科長と松井妙子初代副学科長（第 9 代学科長），峠哲男大学院担当により，資料分析が行われ，平成 25（2013）年度に文科省ヒヤリングを受け，平成 26（2014）年 4 月に文部科学省から公表された（図 7）．当看護学科における新たなミッションは，次の通りである．

○ 香川大学の理念等に基づき，地域の看護人材の養成を主な役割として，高度実践家としての看護師等を養成することにより，香川県の先端医療に貢献するとともに，地域の看護の質の向上に寄与する．

○ 大学院教育において，学内外の自然科学系分野等との学際的交流や，東南アジアを中心とする国際看護貢献活動等を通じ，国際的な視野を持つ看護人材を養成する．

○ 中山間地域や離島における，在宅看護の拡充，養護教諭や看護職員の定着に向けた研究成果の更なる活用等，地域・社会の課題に対応する研究及びその活用を推進する．

全国の国立大学のうち，看護学・医療技術学関係は次の図に集約された．

香川大学は，その特色や強みを生かした機能強化の方向性として，「研究・教育活動による地域社会の課題解決」を行うミッションをもち，このミッションは，平成 7（1995）年に計画した当初設置目的と変更はない．

今後は，令和 4（2022）年度から始まる第 4 期中期目標期間に向け，中央教育審議会答申「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン」において示されている今後の高等教育が目指すべき姿を踏まえ，国際交流などの強みを生かしつつ，新たな目標に向けてミッションを果たす必要がある．特に今後の国際交流は，チェンマイ大学，河北医科大学などとの学生交流，カンボジア健康科学大学との教育力エクスポートと学生の交流を促進する必要がある（図 8）．

図 7　文部科学省 HP に掲載の国立大学のミッション一覧
（WEB 画像からの引用）

## 3．学術雑誌「香川医科大学看護学雑誌」発刊の経緯

香川大学看護学雑誌の発刊の経緯は次の通りであった．平成 8（1996）年 7 月 24 日，管理棟中会議室において，入野学長，宇多副学長，6 教授，2 准教授，看護部長，事務局長と共に，第 5 回看護学科運営委員会が開催された．

席上，報告事項において「香川医科大学医学部看護学科研究報告」の刊行が報告されたことが記録されている．この報告内容は，同雑誌表紙の体裁，日本語と英語の論文テンプレート，発刊までのスケジュール，および雑誌投稿規定であった．投稿に当たっての投稿書類などが了承された．

創刊号の発刊スケジュールは，9 月 15 日迄に投稿の届け出，平成 9（1997）年 1 月 10 日迄に原稿提出と査読，2 月 24 日製本依頼，3 月中旬仕上がり予定で，結局 3 月 24 日に創刊した．この時から，査読は行われてきたが，内部査読者を中心としており，いわゆる学術論文の質を保証する外部査読や専門家査読，ダブルブラインド査読などの枠組みは整っていなかったため，紀要論文とされた．尚，創刊号には，編集後記がないため，編集委員会は不明であるが，第 8 巻において創刊号が真鍋芳樹編集委員長のもと，全教員 7 名で編集されたことが記されている．

この創刊号の発行にあたり，平成 10（1998）年 3 月に発行された第 2 巻において，田中聡学長の「香川医科大学看護学雑誌第 2 巻の発刊に寄せて」が掲載されている．そこには，「香川医科大学看護学雑誌」は平成 9（1997）年 3 月 24 日発行とされているが，実際には平成 9 年 5 月に発行され，教員数や，施設・設備なども問題が生じる中での学年進行を行いながら，続けて第 2 巻の編集が進んでいることが記述されている．この時期，学部教育 2 年目では，研究者養成も行われていないため，目下，看護教員や附属病院看護職員の研究活動の掲載が殆どであった．創刊号は総説 1 件，原著 13 件であった．第 2 巻は，17 編の論文が掲載された．本誌の役割について，田中学長は，看護研究の成果を世に問い，評価と批判を受けることは我々の責務であると述べ，学内外の研究者相互間の学術交流に果たす役割は大きいと期待を述べている．さらに，本誌が看護学科の発展に繋がる情報資源となることの価値も備えていくことへの期待も述べられている．同時に経費の問題が課題であることも指摘された．

## 4．「香川医科大学看護学雑誌」「香川大学看護学雑誌」編集委員会活動の経緯

第 2 巻は，看護学科外から，2 編の論文が寄せられた．第 3 巻は，投稿論文が多かったために，第 1 号と第 2 号が発刊された．第 3 巻第 1 号は，総説 1 編，原著 8 編，資料 1 編，第 2 号は，原著 5 編，報告 2 編を収蔵した．第 4 巻は，完成年度の第 1 期生の卒業と共に発刊され，第 2 巻からここまで小野清美教授が編集委員長を務めた．第 5 巻は竹内博明編集委員長の下で発刊され，事務方の雑務へのサポートが創刊から続いていることが記されている．第 6 巻では，今は亡き竹内教授が編集委員長として後記を記述されているが，若者の礼儀作法や学生を理解することなどについて，雑感が記述されている．第 7 巻は，平峯千春教授が編集委員長を務め，この巻から修士修了

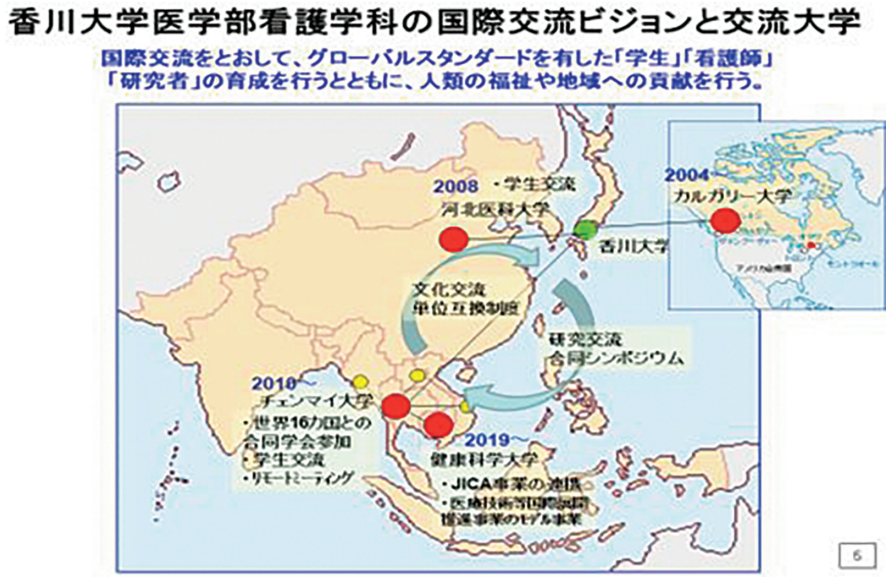


図 8　香川大学医学部看護学科の国際交流
（PPT 画像からの引用）

学生の修士論文が掲載されたことが記されている．

平成 15（2003）年 10 月 1 日，国立学校設置法の一部を改正する法律（平成 15 年法律第 29 号）により旧香川大学と旧香川医科大学が統合し，新しい香川大学として発足，同時に「香川医科大学看護学雑誌」は，「香川大学看護学雑誌」と誌名変更を行った．平成 16（2004）年，国立大学法人法（平成 15 年法律第 112 号）第 4 条の規程に基づき国立大学法人香川大学が発足し，発行者は，国立大学法人香川大学医学部看護学科となった．そこで第 8 巻には，「香川医科大学看護学雑誌」の名称が終巻となると記されている．この編集後記では，香川県さぬき市の俳人，砂井斗志男氏監修の香川大学看護学雑誌への応援連句が掲載されている．

第 9 巻は，「香川大学看護学雑誌」と名称変更して発刊され，特集記事 7 編が掲載された．第 10 巻では，大森美津子編集委員長のもとで投稿規定が変更された．投稿資格者に，本学看護学科の臨床教授，臨床准教授が追加された．第 11 巻では，看護学科 10 周年記念式典が開催されたことが編集後記にも掲載され，喜びが伝えられた．第 12 巻では，峠哲男編集委員長のもと，印刷費の高騰により印刷費の一部負担が検討されたことの詫びが編集後記には記載されているが，CiNii と香川大学学術情報リポジトリの 2 つのシステムによる電子化が実現し，インターネット上での閲覧を可能とし，論文の公開に道を拓いた．また第 13 巻では，投稿料の一部負担が実施されると同時に，論文の質の向上の検討が行われていると記述されている．第 14 巻では，投稿規定の改訂が行われ，投稿時のチェックリストの作成，査読体制の検討が行われていることが峠編集委員長により編集後記に記述されている．第 15 巻では，前年度の編集委員長と共に査読体制を構築した清水裕子編集委員長が祖父江育子教授と共に査読体制を確立させ，巻末には 41 名の査読者リストの掲載を行った．編集委員長は，国立情報学研究所，国立大学図書館協会共催シンポジウムに参加し，世界の潮流がオープンアクセスに向かっていることを編集後記に記述している．第 16 巻では，大森美津子編集委員長のもと査読者更新が行われた．第 17 巻では，投稿者の公平性を担保するために筆頭著者は，一人 1 編のみに制限され，第 18 巻では発刊方法が検討された．第 19 巻では，藤井豊編集委員長のもと創刊以来の冊子体印刷の発行を変更し，オンライン出版としたことが編集後記には記述されている．同時に香川大学医学部ホームページに，本誌ウェブサイトを準備することが記述されている．第 20 巻では，このウェブサイトの URL が編集後記に記載されている．オンライン出版となったことから，図表をカラーに刷ることが可能になった．第 21 巻では，松井妙子委員長のもと編集委員会のあり方検討を行うことが記されている．第 22 巻では大森美津子編集委員長の下，47 名の査読者リストが記載されている．第 23 巻では渡邉久美編集委員長のもと 48 名の査読者リストが記載され，この年，元号が変わって平成の 30 年間を振り返っている．第 24 巻は 2020 年 3 月に発行された．2020 年度には，本紙掲載の論文を更に広く活用していただくために，株式会社サンメディア（東京都中野区本町 3-10-3）に掲載記事の複写許諾の許可を行った．株式会社サンメディアは，国立研究開発法人科学技術振興機構のデータベース JDream と連携し，本紙論文を複製し提供する業務を行っている．この許諾は，ISDN1349-8673 香川大学看護学雑誌，2189-270 香川大学看護学雑誌 Web 版，1342-8926 香川医科大学看護学雑誌である．これにあたって渡邉委員長は，これまでの著者に対する著作権に関する同意の確認を行うため，オプトアウトを行って著作権の同意を担保した．

このように各編集委員長は，毎年不断の努力を重ね，それぞれが持っているタレントを遺憾なく発揮し，「香川大学看護学雑誌」に収蔵した論文を世に広めようと努力された．

## 5．雑誌掲載論文数の推移

香川大学看護学雑誌は，令和 2（2020）年度現在，看護学専攻修士課程の修了生論文の公表の場として大きな役割を担っている．修士論文は，2 年から 4 年間の研究期間を経て，論文を作成し，審査を受けて最終論文を作成し提出する．研究は，社会還元を目的としていることから，学会発表や論文として公表する必要がある．

現在の修士課程学生は，社会人が多くを占めており，就業しつつ修士論文を作成することが多いことから，所属学会を特定している学生も少なく，修了後間もなく論文公表の場をえることは容易ではない．そこで，できるだけ早く，研究成果を社会還元する目的で，所属機関が研究誌を発行することがある．多くの大学では「紀要」としているが，外部査読の体制を整え，学術誌を発行する大学もある．本誌は，少なくとも，自校修了生の論文公表の場として機能してきたが，当初から「学術雑誌」を称していた．しかし，第 15 巻になってようやく外部査読体制を整え，現在に至っている．これまでの本誌の掲載論文数は，以下に示す．

雑誌掲載論文は，当初は教員や附属病院看護部の活動の成果発表の場であった感があり，多数の掲載があった．

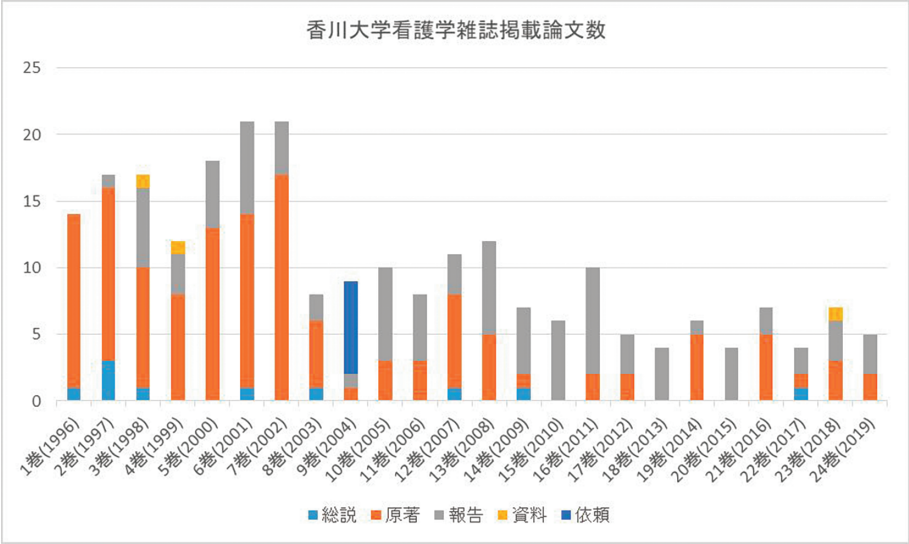


図 9 「香川大学看護学雑誌」掲載論文数

平成 15（2003）年で一つの山が形成されているのは，看護研究における研究倫理の要請の影響ではないかと推察される．（図 9）

日本看護協会が看護倫理や看護研究に関する国際的な指針「ICN 看護師の倫理綱領」を受け取ったのは，2000 年であった．この倫理指針を作成し，日本看護科学学会の英文誌を指導した William L. Holzemer 氏は，日本語訳された倫理指針の中で，研究倫理の進展を次のように説明した．看護における初の国際倫理綱領は，1953 年にブラジルで開催された各国の会員協会の代表者会議（CNR）によって採択され，1996 年には「看護研究のための倫理のガイドライン」と題した指針が発行された．2003 年にはこの指針は改定された．1999 年には「研究に基づく実践は，専門職としての看護の顕著な特徴である．質的および量的双方の看護研究が，質と費用効果が高いヘルスケアにとって重要である.」との「看護研究に関する ICN 所信声明」がなされ，2000 年には ICN 国際看護協会の倫理綱領にも，「看護師は，看護実践および看護管理，看護研究，看護教育の望ましい基準を設定し実施することに主要な役割を果たす」と明記された．

このように，国際的な指針は，日本看護協会にも報告され，研究に基づく実践の強化とその研究そのものの倫理や実践の倫理が明確化された．特に，看護研究は患者の参加を伴うことが多いため，人権に関する脆弱性（弱い立場にあること）という問題をはらんでいる．そこで，「善行」「無害」「忠誠」「正義」「真実」「守秘」の 6 つの倫理原則がその後の開発指針となった．日本の看護学会の一つである日本看護研究学会は，平成 26（2014）年度定時社員総会において，研究発表や学術論文の投稿においては，研究の科学的妥当性と研究実施上の倫理的適合性についての担保が必須要件とされるようになったことが告知された．この科学的妥当性の中には，抄録の Academic English の問題も指摘され，Native check が担保されるよう求められた．その後，2010 年以降は査読の質的基準が明確化されるなど，看護学学術成果物への保証システムは進展した．

このような経過から，平成 15（2003）年頃の投稿の動きを察することができる．実際，本紙の学術雑誌の査読システムは，前述の通り第 15 巻からである．この巻の編集委員長が，当時全国学会の学会事務局長として，日本学術会議から学術成果物に対する国際的な要請を受ける機会をもち，看護学科の要請も相まって，平成 21（2009）年の編集委員長の査読体制構築を引きついで整備した．この時期から「原著」や「報告」も質的保証がすすんだといえる．

今後は，心理学科との連携，助産師や保健師課程の大学院化，博士後期課程の開設およびその延長線上にある成果物の社会還元について，一層取り組みを行う必要がある．

## 謝辞

四半世紀をまとめるにあたり，田中輝和名誉教授，平峯千春元教授（平成 9（1997）～平成 18（2006）年看護学

科在籍）からのご支援と助言，ご寄稿下さった上田夏生現医学部長，キシ・ケイコ・イマイ元教授，宮武陽子元教授，企画にご支援下さった雑誌第 25 巻の渡邉久美編集委員長と編集委員に御礼を申し上げます.
今後の学科を担う方々の参考になれば幸いです.

令和 2（2020）年初秋